

# 空海のたとえ話

大賀 睦 夫

## はじめに

筆者は、前著で試論として「四国遍路におけるメタファー思考」という考え方を提示した<sup>1)</sup>。大自然の中を40～50日間歩き続けるのが四国遍路である。毎日、海や山や空を見ながら、ある時は雨に打たれ、ある時は風に耐えながら、大地を踏みしめていく。その間、自然はたとえ話によってわれわれにあらゆる真理を語りかける。お遍路さんは、そのことに気づき、そこから人生の智慧を学びとる。遍路とはそのような経験を積み重ねることではないかというのがその趣旨であった。たとえば、風ひとつない日に、池の水が鏡のように静止して空や山やあらゆるものを映している、そういう場面に遭遇したとしよう。そのようなめったに見られない光景に、われわれは感動するであろう。そして、私の心もこのようでありたいと願うであろう。静止した池の水は平安な心の、波立つ水面は乱れる心のたとえ話である。煩惱という風が吹くから心は乱れる。

これはエリアーデがいうところの、象徴的思考とも言えるであろう。現代人は概念的思考に慣れ親しんでいるが、エリアーデは、古代人は象徴的思考をしたという<sup>2)</sup>。同様に、スウェーデンボルグも古代には「相応の知識」があり、それを知ることが知識の中の知識であったという。相応とは、自然界にあるものはすべて霊的なものに相応しているということである<sup>3)</sup>。イエス・キリストはたとえ話で真理を語ったし、大乘仏教の経典は、象徴やたとえ話で溢れている。

---

1) 大賀, 2011。

2) エリアーデ, 76 ページ。

3) スウェーデンボルグ, 201 節。

古代人はたとえ話で真理を学んだのである。

弘法大師・空海も、この世のすべてが霊的な何かを語っていると言った。「六塵悉文字」、六種の対象はすべて文字である<sup>4)</sup> 見えるもの、聞こえるもの、嗅げるもの、味わえるもの、触れられるもの、考えられるもの、すべてが文字なのである。ただ空海が、「よく迷いまたよく悟る」とも述べるように<sup>5)</sup> 自然から何を学ぶかは人により異なる。たとえば、遍路では必ず雨に悩まされる日がある。そのとき、雨に濡れるのは嫌だと思わないのか、雨が草木を育てる、雨に打たれて心まで洗われる、ありがたいと思うのか。もしお遍路をするなら、できるだけ自然の言語を深く理解して、自然から多くを学びたいものである。空海はよく悟った人だったのであろうから、彼が自然の言語をどのように理解したかを彼の宗教的著作にさぐり、その答えを参考にして遍路の旅に出るなら、われわれはより豊かな学びができるのではないだろうか。

本稿は、そのような目的で、「六塵悉文字」の意味を、空海自身の宗教的著作の中にさぐってみようとする試みである。

### 1. 大日経のたとえ話

空海の宗教思想の中核をなす心の発展の十段階、すなわち十住心は、その名称のほとんどが『大日経』住心品からとられている。彼がそれほどまでに重視した経典『大日経』住心品、「大日経疏」にはどのようなたとえ話が含まれているか。まずそこから始めてみよう<sup>6)</sup>

太陽は暗黒を除いて遍く照らす。大日経によると、暗黒とは無明であり、太陽が照らすのは真理の世界である。ところで、この世の太陽は光の裏に影をつくるし、昼は照らしても夜は照らさない。しかし大日如来の智慧の日の光はそうではない。すべてのところに遍くして偉大な輝きである。内と外、方角と場所、昼と夜の区別が全くない。

---

4) 『声字実相義』274 ページ (『空海全集』第2巻)。

5) 同上 279 ページ。

6) 以下の説明は、宮坂宥勝訳注『密教経典』中の『大日経』住心品、『大日経疏』(抄)に依拠している。

この世では、すべての植物は太陽に照らされることによって、その本来の性質にしたがって成長することができる。この世のすべてののはたらきは太陽によってなされる。そのように、如来の太陽の光も遍く真理の世界を照らして、はかりしれないほど多くの生きとし生けるもののさまざまな諸善をもたらす。

厚い雲が太陽を隠すことがある。もちろん、それは太陽が減びてしまったわけではない。厚い雲が去れば再び太陽は世界を照らす。われわれの心の太陽も同様である。

空が象徴するものは何か。住心品の冒頭に、すべての金剛杵を手にもつ者が集まったとある<sup>7)</sup>。その中の三尊に「虚空」の文字が冠されている。虚空無垢執金剛、虚空遊歩執金剛、虚空生執金剛である。ここに示されているように、虚空すなわち大空は、垢れがない、廣大無辺であり、自由自在である、何ものにも執われぬ自由の境地等々の意味がある。また、大空にはすべての思慮を離れている、思慮もなく無思慮もないという意味もある。さらにまた、心は大空と同じであるという。大空にかたちがないように、心はかたちがない。

大地はすべての人のよりどころである。そのように、智慧はすべての人のよりどころである。火はすべての薪を焼いてもなお厭きるところがない。そのように、智慧はすべての無智という薪を焼いてもなお厭きるところがない。風がすべての塵を吹き払うように、智慧はすべての煩惱の塵を除き去る。水がすべての人々を飲ばせ楽しませるように、智慧はすべての人を利益し安楽ならしめる。このように地水火風の霊的意味が語られる。

「菩提心を因とし、大悲を根とし、方便を究竟とす<sup>8)</sup>」という有名な三句の法門がある。ここでは、智慧は植物にたとえられる。菩提心は植物の種である。草木は、そこから芽を出し、根を張り、生育して果実を結ぶ。植物の生育は、そのまま智慧の完成を表す。また、心の成長を次のようにも説明する。愚童凡夫は羝羊のごとき性欲と食欲のみの存在であるが、ある時、一日食事をとらず、その食物を他に与えようという心が生じる。これがよい行為が生じる種子

---

7) 『大日経』16 ページ（『密教経典』）。

8) 同上 30 ページ。

の心である。そこから、父母や男女、親戚に財物を施す。これが牙種の心である。施しを親戚ではない他人に与えることができれば庖種の心、才能があり徳の高い者に与えるなら葉種の心、音楽を奏する楽人やすぐれた年長者にささげるなら敷華の心、親愛の心から供養すれば成果の心とだんだんに成長していく。そして、戒を守って死後天界に生じれば、果実がそのまま次の種子となる受用種子である。このように、植物の成長は心の成長を表す。

さらに、大日経では六十心が説かれている。その中のいくつかはたとえばによって説かれる。河の心、陂池の心、井戸の心、狸の心、狗の心、鼠の心、師子の心、ふくろうの心、烏の心、刺の心、窟の心、風心、水心、火心、板の心、毒薬の心、罽策の心、械の心、雲の心、田の心、塩の心、剃刀の心、弥蘆（須弥山）等の心、海等の心、穴等の心、等々。

その霊的意味は次のとおりである。河は、兩岸によって流れて一方の岸によらない。陂池は、河の流れが湖や池に流れ行っても厭き足りることがない。井戸は、深い上にもまた非常に深い。狸は、進んで積極的に行動しない。狗は、わずかばかりのものを得て喜び満ち足りている。鼠は、あらゆる拘束を断ち切ろうと思いつける。師子は、心のおそれ・よわみがない。ふくろうは、暗夜の中で考える。烏はどんなところでも驚き恐れる。刺は、あらゆる場合に悔いること。窟は、現実離れした理想の海底宮殿・地下宮殿である。風は、あらゆるところにひろがって起こる。水は、すべての善ならざるものを洗いすぐ。火は、盛んに燃えて熱を出す。板は、バランスを保つ。毒は、生まれながらに得た命がなくなる。罽策は、自我の束縛に住する。械は、両足を足かせで縛られている。雲は、降雨の思いをする。田は、田地を耕作するようにつかえること。塩は、食物にしみとおって至らないところがない。剃刀は、髪を剃るように剃り除くことにとどまる。最高峰の弥蘆（須弥山）は、高ぶり思いあがることである。海は、すべての河川を呑みこむように、他の勝れたものを自分に取り入れて自身の功績にすることである。穴は、漏穴すなわち怠惰である。

さらにまた、大日経では実体のないもののたとえとして、幻、陽焰、夢、影、蜃気楼、響き、水月、水泡、虚空華、回転する火の輪が言及されている。これらのものには実体がない。実は、存在するすべてのものに実体がないのだ

と説く。

大日経では、以上のように自然の靈的意味を教えている。太陽は究極の神であり仏である。日の光は真理の光である。雲はそのような真理の照らしを妨げるもの。大空は廣大無辺の心である。大地は支えとなる智慧、水はすべてを洗い清める智慧、火はあらゆる無智を焼き尽くす智慧、風は邪念を吹き飛ばす智慧である。犬やネズミやライオンなどあらゆる動物がいろいろな性質を象徴する。ふくろうやカラスなどの鳥、井戸や田や剃刀や、その他一切のものが、それぞれの性質をあらわす。幻や陽焰は実体がないという意味である。

## 2. 動物、植物、昆虫

筆者の調査では、歩き遍路の遍路動機でいちばん多いのが「自己変容」であった<sup>9)</sup>。今の生き方に疑問を抱き、不満を感じ、場合によっては自殺を考えるほど自己否定の気持ち強い人たちが、新しい道を見つけないという一心でお遍路をしている。彼らは「自分探し」、「自分を変えたい」「愛のある人間になりたい」などの動機をあげる。空海によると、人間が「自己変容」していく存在であることは自然、とりわけ動物、植物、昆虫が教えているところである。そのようなたとえ話を彼の著作から取り出してみよう。

### 動物の生き方

馬は理解、羊は仁愛の善、狼は強欲、ライオンは力、鳩は信仰の真理と善、カラスは誤謬、ヘビは感覚的なもの…等々と説くスウェーデンボルグの相応の教説と比較すると、空海の十住心論における動物の見方はやや一面的で、動物の意味するものは劣った生である。六道輪廻の思想では畜生道という。人間の生き方にあてはめると、動物的な生き方は最低レベルの生き方になる。

空海によると、雄羊は「ただ性と食とのことを思いつづけるだけ」<sup>10)</sup>であり、「おとって力弱い」<sup>11)</sup>存在である。また、「豹・狼・獅子・虎などの野獣は

9) 大賀「四国のスピリチュアル・ツーリズム」49 ページ。

10) 『秘蔵宝鑑』14 ページ（『空海全集』第2巻）。

11) 同上17 ページ。

他の動物を食い殺し、鯨やマカラ魚のような大魚は他の魚どもを呑みこんでいる」<sup>12)</sup> このように、動物が象徴するものは、本能のままの劣った生であり、残酷な弱肉強食の世界である。人間が動物的な生き方をするとき、貪り、怒り、愚かさによって、他人を傷つけ、自らを毒する。空海は、このような人間の心の最低の段階を、『大日経』の表現にならって「異生羝羊心」と名づける。「世のつねの者がはなはだしく無知の酒に酔って善悪の見さかいがつかず、愚かな者が暗く無知で、因果の理法を信じない」心という<sup>13)</sup> 人間が、動物のように、本能のままに、自己の欲求に従って生きるのであれば、そこに人間的なものは何もない。十住心の第一段階は、「異生羝羊心」である。

十住心論には、畜生の生存の仕方の七種類が説かれている。マムシ、蛇、カラス、トビなどは、怨対畜生である。その意味は「邪な教えによって邪な議論をする」である。オシドリ、ハトなどは相随畜生である。その意味は「愛し欲する心をもって布施をし契りを結ぶ」である。のろや小鹿は怖畏畜生である。彼らはいつも落ち着かない。蚕は化生畜生である。亀、魚、カニ、ハマグリなどは湿生畜生である。卵生の飛鳥、ワシなどは、怒りの心を起こして国土を破壊することを意味する。そして胎生畜生は、邪な考えをもち非礼な態度をとることを意味するという<sup>14)</sup>

### 蟻虫は定んで蟻にあらず

人間が本能のままに生きるのであれば、それは第一段階の生き方である。しかし、人間はそこにずっと留まっているわけではない。青虫はいつまでも青虫ではない。時が来れば蝶になって自由に空を飛びまわる。そのように、「雄羊のような心にはそれ自体の本性がないのであるから、善き心にかえる」と空海はいう<sup>15)</sup> 愚かな児童のような心も、心のうちにある絶対真理の影響によって、苦をいう。仏の戒めを守って天界に生まれ、善を修めて地獄を脱しようとす

12) 『秘蔵宝鑑』18 ページ (『空海全集』第2巻)。

13) 同上16 ページ。

14) 『秘密曼荼羅十住心論』57 ページ (『空海全集』第1巻)。

15) 同上222 ページ。

る。空海は第三住心のたとえに「蟯虫は定んで蟯にあらず」を用いている。

## 植物の成長

自己変容は、植物の成長の過程により明瞭に示されている。空海は言う。「そもそも冬枯れの樹木でも、いつまでも枯れているのではない。春になれば、芽ばえて花が咲く。厚氷でも、いつまでも氷っていることはない。夏になれば解けて流れ出す。穀物の芽も湿気があれば発芽し、果実も時がくれば実をむすぶ。」<sup>16)</sup> 季節の推移に応じた、このような植物の成長の過程は、そのままわれわれの霊的成長の過程である。

冬枯れの樹木が春になって芽ばえる、あるいは暖かくなって氷が解けだすとは、機縁があればだれにでも善心が芽ばえるということである。「物にきまった性質はない。どうして人はつねに悪人であることがあろうか。機縁にめぐりあえば、なみの者でもすばらしい道を願う」。樹木の芽が、種子より芽ばえて蕾となり、葉がのび、花が開き実をむすぶ。そのような自然の営みを見て、心に善心が芽ばえ発展することを想起する。それは、心が新たな段階に上昇することを意味する。そのような善い生き方とは、具体的には「五常」、「五戒・十善」の教えにしたがって生きることであるという。これを実行すれば人間の世界に生まれることができる。実行しなければ人間の世界に生まれることはできない。「春に穀物の種を播かなければ、どうして秋の収穫がえられようか」<sup>17)</sup> ここでも植物の成長のたとえが用いられている。

空海によると、この善心が芽ばえる心の段階は「愚童持斉心」である。これもまた、『大日経』の教えにもとづく命名である。愚童凡夫でも、ある時に一つの思いが生ずる。これが「持斉」、すなわち戒律を守って心身を清浄に保つことである。「これをもとにして六斉日に父母をはじめとして親族たちに施しをする。これが第二の芽ばえである。また、この施しをもって親族でない他人に与えてやる。これが第三の蕾のふくらみである。またこの施しをもって徳の

---

16) 『秘蔵宝鑑』23 ページ（『空海全集』第2巻）。

17) 同上 26 ページ。

ある立派な人に与える。これが第四の葉のひろがりである。また、この施しをもって、よろこんで芸能の人に与え、またすぐれた仏者にささげる。これが第五の花びらの開きである。またこの施しをもって親しみ愛する心を起こし、その心をもってあらゆる人びとに与える。これが第六の実りである」<sup>18)</sup> このように空海においては、大日経にならって、植物の成長と人間の心の成長の相応が説かれている。

### 3. 金、ダイヤモンド、蓮華、満月

空海は十住心を説いている。低い心のレベルから最高の心のレベルに至る諸段階があるという考えである。「自己変容」もこのような階層秩序が前提になっている。このような階層秩序は物質世界にも見られる。金属には鉄や鉛のようなありふれたものから金やプラチナのような貴金属までいろいろな種類がある。石も港の捨石にするような石から宝石までいろいろある。これらは霊的世界の象徴のように思われる。霊性には根源的に階層秩序がある。低いレベルがあり、高いレベルがある。その中で、われわれはより高いレベルをめざすし、めざさなくてはならない。

#### 「玉石混交」の世界

私ごとであるが、夏の遍路でアブに悩まされたことがある。鬱蒼たる山中で、立ち止まる度に、何匹ものアブが体にとまってくる。急ぎ足で山道を駆けのぼり、ようやくアブのいない開けた場所に来てはっと一息ついていると、今度は大きな虫がドンとぶつかってきた。見ると、玉虫だった。しばらく筆者の手のひらや腕の上を歩きまわった後、また大空に飛んで行った。虹色に輝くその昆虫の美しさは、まことに宝石のようであった。合理的な理由は何もないが、これで心が晴れ、そのときの夏のお遍路は正解だったという確信が湧いてきた。別の機会の話だが、道端にうずくまっていたメジロをそっと手にとったことがある。メジロを初めて間近に見て、その羽根の緑の美しさにあらためて驚

---

18) 『秘蔵宝鑑』27ページ（『空海全集』第2巻）。

嘆した。手のひらのメジロをどうしたものかと思っていると、またそのまま遠くへ飛んで行った。お遍路ではいろんな珍しい経験をする。

ここに紹介したのは、筆者がお遍路において高貴な生きものと遭遇した時のことである。大自然は、その構成要素のすべてが高貴なものというわけではない。スズメやカラスはたくさんいるが、メジロのような高貴な鳥は少ない。蚊やハエやアブのような迷惑な虫は多いが、玉虫のような高貴な虫は少ない。少ないからこそ出会うとうれしい。そのことは、この世のすべてに当てはまる。たくさんの石があるが、ダイヤモンドやルビーなどの宝石は少ない。金属も、鉄は大量にあるが、黄金やプラチナは少ない。

空海はこのような事実を、聖人、さとりにいたる人は少ないことのたとえにしている。第四住心・唯蘊無我心の章は、憂国公子と玄関法師との問答という形式で議論が展開する。玄関法師とは奇妙な名前だが、奥深い仏教のほんの入り口にいる僧なので玄関法師という。憂国公子は、声聞乗の人と法とに敬意を払いつつも、今の仏者は「頭を剃っても欲を剃らず、衣を染めても心を染めていない」と仏者の非法を非難する。玄関法師は答える。「小さな羽虫はどうして大鳥の翼を見ようか、また守宮（やもり）は龍の鱗をどうして知ることができましょう。蝸牛の角は天上をつくことができない。焦僥国の小人はどうして大海の底をふむことができましょう。…愚かで不足している者は思うに、このようなものです。また、そもそも物事には善悪があり、人には賢愚の別があります。世に賢く善なる者はまれで、愚かで悪しき者は多いのです。麒麟とか鸞鳥、鳳凰は動物の中でまれにいる秀れたものです。摩尼宝珠や金剛石は金石の中で不可思議でめったにないものです」<sup>19)</sup>

このように空海は、高貴なものは少ないというたとえ話を玄関法師に延々と続けさせる。とはいうものの、それらのよきものが現れると天下は太平になる。聖天子が世に出ると世界はよく治まる。鳳凰や麒麟がまれだからといって、それらを絶滅させてはならない。如意宝珠をえないからといって鉱物を棄ててしまっではいけない。このように玄関法師はいう。仏教においても同じで、す

---

19) 『秘蔵宝鑑』48ページ（『空海全集』第2巻）。

ぐれた仏者は多くない。しかし、「さとりに向かう賢者聖人が世にないからといって、どうしてその道を断つことがありましょう」と彼は説得するのである。

玄関法師はまた、「戒を保ち瞑想とさとりの智慧をえた人は全くでないのか」という問いに、次のように答える。「天空は西に向かって動くが、日月は東に運行します。南方星宿の南斗は日月にしたがって運行するが、北極は不動です。冬の天は万物を枯らすが、松柏はしほみません。冬的时候は水をこおらせるが、海水や酒はこおりません」<sup>20)</sup> 同様に、世の中が濁り乱れたとしても、戒を保ち瞑想とさとりの智慧を得た人が全くでないということはないのだと言う。このように、「少ないがゼロではない」事例を、自然から次々にもちだしては、聖人出現の根拠としている。

憂国公子と玄関法師の議論のテーマは多岐にわたるが、関連テーマの中から、最後にもう一つ、「非法な仏者が多いのはなぜか」という問いを取り上げよう。玄関法師は答える。「大きな山は恵みが広いから鳥や動物はあらそってやってくるし、薬草も毒草もまじって生えています。深い海はゆくところが大きいから、魚類が集まって泳ぎ、龍や鬼もいっしょに住んでいます。宝玉のあるあたりにはきまって悪鬼がこれを取りかこみ、宝の庫のそばにはきつと盗賊がいてこれをうかがっているものです。美女は別に呼ばなくても好男子や醜男が追いかけあい、医者の家は呼びよせなくても病人がやってくるものです。…」<sup>21)</sup> このように玉石混交が現実の姿であるという。

法があり、經典の教えがあるにもかかわらず、それらに背くものが大勢いるというのが現実である。それは否定できない。しかし、「毒を薬に変え、鉄を金にすることが必要であります」と錬金術のたとえによって、空海は心の上のレベルをめざすことの必要性を説く<sup>22)</sup> これは第四住心、声聞乗の章で説かれているたとえである。

弁頭密二教論には、醍醐（バター）や宝珠によってすぐれた教えが示されて

20) 『秘蔵宝鑰』51 ページ（『空海全集』第2巻）。

21) 同上 74 ページ。

22) 同上 75 ページ。

いる。最高の味である「醍醐の味を捨てて牛乳を求め、宝珠を投げ捨てて、魚珠を大切にするほどに、道理をわきまえず、ものごとを正しく評価し判断できないのでは、仏性（仏としての本性）ある人間とも思えないし、治療する術もない重病人というべきで、すぐれた医者も手を施し得ないように、仏の教えもなんら益するところはない」<sup>23)</sup>

### ダイヤモンドのたとえ

仏教用語の「金剛」は、元来はもっとも硬い金属、あるいはダイヤモンド（金剛石）を意味するが、『金剛頂経』のように、最もすぐれたもののたとえとして用いられている。空海は、金剛は如来の真実の智慧という。「金剛は、世間のあらゆる堅固な宝石の名であり、それを堅固無比の如来の真実・智慧に喩える。金剛宝には多くのすぐれた徳性がそなわっている。この金剛宝は（長い時間）地中に埋もれていても朽ち果てることがない、火の中に投じても溶けることがない。貧しい者はこれを見ることがむずかしく、これを手中に収めるものは富貴となる。戦争の道具のなかでは最も勝れ、永久に変わることなく堅固である。このように、如来の有する真実の智慧も、多くのすぐれた徳性をそなえている」<sup>24)</sup>

### 蓮華の意味

十住心の第八は「一道無為住心」であり、法華一乗の教えが明らかにする心のあり方である。したがって、ここでは蓮華の意味するものが説かれている。「根源的な無知である、貪り・瞋り・癡かさの泥のなかに沈んで、六つの迷いの世界や生きものの生まれる四つのかたちといったようなけがれたところに往き来しても、それに染まらず汚されないことは、あたかも、泥中から咲き出た蓮華のようである」という。生きとし生けるもののすべての身体と心が本来清らかであるということを蓮華があらわしている。

23) 『辯顕密二教論』151 ページ（『空海全集』第2巻）。

24) 『金剛頂経開題』154 ページ（『空海全集』第3巻）。

空海は、蓮華を観察して自分の心が清らかであることを知り、蓮華の実を見て心にあらゆる徳がそなわっていることをさとる、という頌を掲げている<sup>25)</sup>

次のようにも言う。「内心の妙なる白い蓮の花とは、これはつまり生ける者の根本の心である妙なる真理の蓮の花という秘密の象徴である。花のうてなの八つの花びらはまどかであい等しく、まさに花が咲いている形のようなのである。この花のうてなは、これは真実のありのままの智慧である。蓮華の花びらは、これは大いなるあわれみをもって（人々を救済する）方法である」<sup>26)</sup>

そして蓮の育つ姿を見て人間の生き方を学ぶ。「世間の蓮華はだんだんと成長するが、もし太陽や月の光と時間・季節などを尊ばないときは、すなわち花は咲くことができない。さとりを求める者もまた同様である。秘密のさとりを求める心、真理の体现者のすぐれた価値性、真実のあり方の蔵を持っているとしても、もしもろもろの仏の平等にして大いなる智慧の烈しい日の光を尊ばないならば、すなわち花が咲かない。いまこのさとりを求める者は、この妙なる教えの蓮のうてなの真実の理解を得ていながら、またそれでもなお質問するのは、ひろくこの心のあり方の教えを伝えて、すべての生きとし生ける者にわたし与え、ことごとくにまたこのような開花を得させようと願ってのことなのである」<sup>27)</sup>

『法華経開題』によれば、蓮華の花は曼荼羅そのものである。「すべての世界に存在する数限りない金剛のような堅固な秘密の智慧を正しく区別する象徴は、あたかも、縁にある花しべのようであり、すべての世界に存在する数限りない広大な慈悲から発するあらゆる行為のさとりへの道は、あたかも蓮華の花心のようであり、三つの教えに基づいて、六種の生存世界に形をとって現れる無数の顕現の姿は、あたかも根や茎や葉が、大いに生成して、互いに繁茂し合うようなものである。このように、多くの徳性が完全に備わっているので、『妙法蓮華の曼荼羅』と呼ぶ」<sup>28)</sup>

25) 『般若心経秘鍵』365 ページ（『空海全集』第2巻）。

26) 『大日経疏要文記』616 ページ（『空海全集』第3巻）。

27) 同上 617 ページ。

28) 『法華経開題』309 ページ（『空海全集』第3巻）。

このように、空海は蓮華にさとりの世界を見る。そしてそれはこの世の理想の政治の構造に等しいとも言う。「古代インドの理想的な帝王の即位儀式の例でもって、このことを喩えれば、まさに曼荼羅第三周は、臣下たる諸国の藩侯であり、第二周は、朝廷の政務を司る官僚たちであり、第一周は、君主を補佐する大臣であり、中央の花心の尊格は、以上の者たちに助けられて天下を治める君主のようである。それゆえに、蓮華の中央で常恒なる智慧を有する尊格を偉大なる曼荼羅の王者とするのである。」<sup>29)</sup>

このように、空海は蓮華の花にさとりの世界を、そして理想の政治の姿を見ている。

### 満月の心

修行といっても恵まれた現代のお遍路では、月を見る機会は少ない。しかし、野宿をするお遍路さんにとっては、星辰はもっと身近な存在であろう。おそらく、山林修行者であった空海にとっては、月明かりは今日の街灯のようなものだったにちがいない。

今日の遍路では月を見る機会が少なくなったとはいえ、日常生活ではよく月を見ているので、満月を心に思い浮かべるのは容易である。空海が満月のたとえを持ち出すのは、秘蔵宝鑰の第十住心・秘密莊嚴心の章においてである。空海によれば、満月は菩提心の象徴である。「わたしは自らの心を見るに、かたちは月輪のようである。なぜ、そのかたちを月輪に喩えるかという、満月のまるくて明るいかたちは、そのままさとりを求める心と似ているからである」<sup>30)</sup> また、人間本来の心が「静かで清らかなことは、あたかも満月の光が虚空にあまねくして分けへだてがないようなものである」という<sup>31)</sup>

空海のこれらのことばは、龍猛菩薩の『菩提心論』からそのままとられている。日月観という密教の瞑想法についても同様である。「すべての人びとは、本来、さとりを求める心を有している求道者であるが、(現実には)貪り・瞋

29) 『法華経開題』309 ページ (『空海全集』第3巻)。

30) 『秘蔵宝鑰』130 ページ。

31) 同上。

り・愚かさのために束縛されている。そのために諸仏は、大いなるあわれみの心によってよくたくみな手立ての智慧を発揮して、この非常に深く秘められた瞑想〔三摩地〕を説かれ、修行者に自己の内心に日輪・月輪を観想させるのである」<sup>32)</sup> これもほぼそのまま秘蔵宝鑰で述べられている。

#### 4. 四季，陽炎，風波，星辰

##### 四季の変化に無常を見る

十住心の第五は「抜業因種心」である。業因の種を抜徐する住心の意味である。業因と悪業の因，すなわち十二因縁である。これは，ひとりで修行してさとり縁覚の体得すべき対象であるという。自分自身については，十二因縁を觀察し，外に目を転ずれば「咲く花，葉の緑を見ては，そこに生じ来たって，生をうたい，移ろい，滅する〔四相〕無常の姿をさと，この孤林，聚落の間に住して，言語をまったく絶った瞑想の境を体得するのである」という<sup>33)</sup> 空海は次のような引用も行っている。「世間のあらゆる草木が春に生じ，夏は盛んにしげり，秋はおとろえ，冬には落葉するさまを覩じ，世間の無常の姿をさと，ついに無学果（阿羅漢果）を体得する。これは麒麟の角が一本であるように，孤高にして独一無二である」<sup>34)</sup>

『般若心経秘鍵』には次のような頌を掲げている。「風に吹かれて落ちる木の葉を見て因縁の道理を知る，どのくらいの年月をかけて，生死のくりかえしをさとするのであろうか，露が消え，花の枯れるのを見て，まよいの種を除去する」<sup>35)</sup>

『教王教開題』にも次のような一節がある。「吹く風に秋の木の葉が散るように，いつ散り果てるとも分らないはかない命をむなしくたよりにして，はかなく朝陽に消える朝露のように無常な身体を養うのである。この身体のもろくはかないことは，水の泡のようであり，わが命に実体がないことは夢や幻のよ

32) 『秘蔵宝鑰』130 ページ（『空海全集』第2巻）。

33) 『秘密曼荼羅十住心論』360 ページ（『空海全集』第1巻）。

34) 同上 374 ページ。

35) 『般若心経秘鍵』364 ページ（『空海全集』第2巻）。

うである」<sup>36)</sup>

四国遍路で山道を歩き、四季の変化から無常をさるといえることがあれば、それは空海のいう第五住心ということになろう。

### 陽炎から学ぶ

空海は、十住心の第六「他縁大乘心」に、宗派としては法相宗、教義としては唯識の心をあてている。ここで彼が用いるたとえは、幻や陽炎である。「幻や陽炎のような、あるように見えて実際には存在しない心のありかたの観察にひたすら意をそそぐ」<sup>37)</sup>という。また、大日経から次のように引用している。「また次に秘密主よ、大乘の修行がある。無縁乗（他縁乗）の心をおこして、存在するもの（法）には実体性（我性）がないという。なぜなら、その昔このような修行をした者たちは、心や身体の根底にある阿頼耶識のはたらきを観察し、その本性は幻や陽炎や影・響・たいまつをぐるぐる廻すときできる火の輪（旋火輪）蜃気楼（乾闥婆城）のごとくであると知るから」と。このようにわれわれは、幻や陽炎を見て二空・三性をさとののである。

なお、他縁大乘心では、菩薩の修行の諸段階が説かれているが、この中에서도いろいろなたとえがでてくる。十行の第七に、とらわれることなき行為・無著行があるが、ここでもまた幻や陽炎がでてくる。「すべての存在は幻のようで、もろもろの仏は影のようで、菩薩の行為は夢のようで、教えを説くことは響のようであると観察して、自己の利益も他者の利益も清らかに完成する」<sup>38)</sup>すべての存在が夢・幻のようであるとわかれば、なにものにもとらわれないであろう。十地の第六「現前地」では、世間の生と滅が米作りのたとえで次のように説かれる。「（世間は）行為を田となし、識を種子となし、根源的な迷いの闇におおわれ、愛欲の水にうるおされ、我という慢心で灌溉し、よこしまな見解の網が増加成長して、名まえと存在の芽を生ずる。名まえと存在の芽が増長して五つの感覚機能を生じ、もろもろの感覚機能はあい対して接触を生ずる。ある

36) 『教王教開題』190 ページ（『空海全集』第3巻）。

37) 『秘密曼荼羅十住心論』394 ページ（『空海全集』第1巻）。

38) 同上 408 ページ。

いはさらに終わりに到って没してしまうのを死という」。これは華嚴經からの引用である<sup>39)</sup> 十地の最上位「法雲地」では、雲、雷、雨が、智慧と真理の象徴となっている。「この地の菩薩は自己の誓願の力をもって大いなるあわれみの雲を起こして大いなる教えの雷を震動させ、六神通とさとり智慧と四無畏とをもって電光とし、善行による功德と智慧とをもって厚い雲とする」<sup>40)</sup>

唯識の解説で、「縄を見て蛇だと思う」「縄は麻の集まりにすぎない」「蛇も縄も存在しない」のたとえによって三性が説かれている。縄を見て蛇だと思うのは、実在しないものに執われてそれを存在するかのように妄想することである（遍計所執性）。縄は麻の集まりと見るのは、存在するものは原因・条件によって生起していることである（依他起性）。「蛇も縄も存在しない」は真実の認識である（円成実性）。

### 海印三昧

明鏡止水の出典は莊子、海印三昧は華嚴經。厳密には違うのであろうが、無風状態で波一つない水面の靈的意味を知るという点は同じであろう。十住心論にもそのような光景が、ある心の状態のたとえとして描かれている。「静かであってよく照らし、照らしていて常に静かである。それはあたかも澄みきった水そのものと事物を映し出す水のはたらきとの関係のようなものである。また磨きをかけた黄金とそれに反映する影像とのようである」<sup>41)</sup> これは、法華一乗の教えが明らかにする心のあり方のたとえである。あるいは、如実知自心、すなわち、ありのままに自らの心を知る心のあり方のたとえである。

ここでは、水は事物を映し出すはたらきをしている。そうしたはたらきをするのはそのまま水である。認識対象と認識主観とは一つである。空海は次のように述べる。「認識対象はさとり智慧で、さとり智慧は認識対象にほかならないことを知る。だから認識対象たる客観のない世界という。つまり、それはありのままにみずからの心を知ることで、これを菩提と名づける」<sup>42)</sup>

39) 『秘密曼荼羅十住心論』443 ページ（『空海全集』第1巻）。

40) 同上 453 ページ。

41) 同上 566 ページ。

## 本不生を覚る

海に風が吹くと波が起こる。波は風という条件によって起こる。もろもろの現象している存在も波と同じである。存在するものは空にはかならない。存在するものと空の関係は、波と水、指輪と黄金の関係に等しい。第四住心の「唯蘊」の立場は、あらゆるものに実体がないことを知らない、また第六住心の「他縁」の立場は、認識対象と認識主観とを分けへだてていると空海は言う。(阿頼耶の)心の本体[心王]は絶対自由で、水のように本来清らかなものを得る<sup>43)</sup>

われわれの心は海である。風が吹くと波が起こり、風がおさまると波が消えるように、条件にしたがって心のはたらきが起こったり消えたりする。心のはたらきは波である。心の本体、心王は海である。波と水とが離れて存在しないように、心のはたらきと心の本体はひとつである。心のはたらきは波と同じく、条件によって起こったり消えたりするが、心の本性は常に生滅することがない。心は本来生起しないものである。

このように、「心の本不生を覚るは、すなはちこれ漸く阿字門に入るなり」という<sup>44)</sup>

## 黄金の獅子

空海は、華嚴宗の概要を示すために黄金でできた獅子を取り上げる。黄金の獅子から五教、十玄、六相と華嚴の瞑想を学びとることができるという。十住心論に紹介されるのは、法蔵撰『金師子章』に対する浄源『金師子章雲間類解』の抄出とされている<sup>45)</sup>

1. 金にはそれ自体の本性がないから、鍛冶工によって獅子の像を作ることができる(縁起)。2. 存在するものはそのまま空であることをわきまえば、獅子のかたちはかりのものであって、そのものはただ真金であるから、獅子は存在するのではない。3. 獅子は理論的には存在せず、常識的には存在する

42) 『秘密曼荼羅十住心論』567 ページ (『空海全集』第1巻)。

43) 同上 516 ページ。

44) 同上 518 ページ。

45) 同上 661 ページ参照。

(遍計)。金の本性は不変である(円成)。金製の獅子が存在するかのようである(依他)。4. 金に獅子をおさめれば、金以外には獅子のかたちとして得られるものはないから、相(かたち)がない(無相)。5. 獅子は生じたり減したりするけれども、金の本体は増加したり減少したりすることがない(無生)。6. 五教を論ずるに、(1)この金製の獅子は、ただ原因と条件とによって生じたものにすぎない。それは一瞬間毎に生滅しているから、全く獅子としての存在は認められない(声聞)。(2)条件によって生ずるものは、それ自体の本性がない。一貫してただ空のみである(大乘始教)。(3)一貫してただ空のみであっても、幻のごときものが明らかであることをさまたげない(大乘終教)。(4)この二つの相が相互にうばい合って、両方ともなくなつて知的なはたらきが存せず、ともに力がない(大乘頓教)。(5)この心のはたらきが尽きて本体があらわになるものが混じって、一かたまりになって大きなはたらきをしきりに起こし、起こるのは必ずすべて真である(一乗円教)。7. 十玄(華嚴の奥深い海に入る門戸)について。(1)金と獅子とが同時に成立し、完全にそなわるのを同時具足相応門と名づける。(2)金と獅子と互いのかたちが成立し、一と多とがさまたげることがない(一多相容不同門)。(3)もしも獅子をみれば、ただ獅子だけであって金はない。もしも金をみれば、ただ金だけであって獅子はない(秘密隱顯俱成門)。(4)この獅子の眼や耳や身体の部分、一々の毛なみにそれぞれすべて獅子をおさめる(因陀羅網境界門)。(5)この獅子の眼に獅子をおさめてしまえば、すべてが全く眼だけである(諸藏純雜具徳門)。(6)獅子のまろまろの感覚器官や一々の毛のさきに、みなことごとくすべて獅子をおさめてしまい、一々にみな完全にゆきわたる(諸法相即自在門)。(7)獅子はあるいは隠れ、あるいは顕われ、または一または多、たしかに純または雜、力があるのと力がないのと、これに即し、かれに即して、主たるものと随伴するものとが光をまじえ、理法と現象とがひとしく現れて、みなことごとく容れあつて、安立するのをさまたげず、わずかなものでもさまたげず成就する(微細相容安立門)。(8)この獅子は作られたものであつて、一瞬一刻に生滅して一瞬間たりとも中断することがない。これを分けて三つの時間、過去世・現在世・未来世とする。この三世にそれぞれ過去世・現在世・未来世があつて、これらの三と三との位

相を合わせて九世をたてる。その九世をさらにひとまとめにして一と数えるところの教えとする（十世隔法異成門）。(9)この獅子と金とは、あるいは一方が隠れ、あるいは一方が顕れたり、あるいは一であったり、あるいは多であったりして、それ自体の本性がなく、心のめぐりかた次第で現象といたり理法といたりする（唯心廻転善成門）。(10)この獅子は根源的な無知（無明）を表現するものだと説き、この金という本体については完全に真実不変の本性をあらわす（託事顕法生解門）。8. 六相を括る。9. 菩提を成ず。10. 涅槃に入る。すなわち、この獅子と金とをみるとき、この二つの相がともになくなって煩惱を生ずることなく、美しいものとみにくいものとが眼の前にあっても、心安らかなことは海のようなものである。

### 太陽や月や星は虚空に常に存在する

太陽や月や星が虚空に常に存在するように、無数のさとの智慧は常に存在している。高山が大空をかわかし、高い台（たかどの）が天を二分しても、そのために損なうことも減ることもないことが虚空の性質であり、またこの世が破壊されるとき、洪水によって大地が流され、猛火が台（たかどの）を焼き払っても、そのために増えることがないことが虚空の性質である。一心の虚空、すなわち絶対のさとの世界もこれと同じである<sup>46)</sup>

太陽や月や星はもともと虚空にあるけれども、雲や霧によっておおいかくされ、煙やちりによって覆われることがある。愚かな者はこれを見て、太陽や月がなくなってしまったと思う。その始めもわからない遠い昔からもとよりそなわっている仏身は、もともと心という空に存在しているが、妄想によって覆われ煩惱につきまとわれている。

本来そなわっているさとのすがたは、箱の中の鏡に等しく、本来そなわっているさとの智慧は、鉾石の中の珠の如くである<sup>47)</sup>

本来所有しているところの三密は、天にかかる太陽の如くであり、密教の本

46) 『卍字義』309ページ（『空海全集』第2巻）。

47) 同上318ページ。

来所有している四種の智慧は、地中に埋まっている金のようなものである<sup>48)</sup>

### 雨足は多くとも、それらは一つの水である

雨足は多くとも、それらはいずれも一つの水である。灯光は無数であるけれども、その光は融け合ってしまい、区別することができない。帝釈天の宮殿を飾っている網の目につけられた珠玉に反映する灯火の如くである。そのように、無量無限の仏・菩薩・諸尊がすべてすなわちわが宝である。同一であってしかも多数であり、多数である故に同一である<sup>49)</sup>

### 5. 幻覚、病氣、障害、薬

空海が、ものの見方、ものごとへの対処の仕方をたとえによって教えているところがある。そのような箇所をいくつか取り出してみたい。まちがった見方は、幻覚や病氣や障害にたとえられている。正しい見方は薬である。

### 病氣に应ずればことごとく薬である

病氣に应じてあらゆる種類の薬がある。毒草も病氣にあえば妙薬である。仏のさまざまな教えはこのような薬である。だから宗に俱舍宗、成実宗、三論宗、法相宗、律宗、華嚴宗、天台宗とあり、互いに競い合っているが、悪口を言いあうのであれば、これは仏の御心にそむくものである。空海に従えば、あらゆる教えは、教えにレベルの高低があるとしても、それぞれのレベルで有効性をもつのであり、決して否定されるべきものではない<sup>50)</sup>

「夫れ、仏に三身有り、教は、則ち二種なり」<sup>51)</sup> 仏は、法身、応身、化身の三身があり、応身、化身の教えが顕教であり、法身の教えが密教である。仏教の教えを薬にたとえて、病氣に应じて薬を処方するというのは、顕教についていえることであろう。

48) 『卍字義』320 ページ (『空海全集』第2巻)。

49) 同上323 ページ。

50) 『秘密曼荼羅十住心論』12 ページ (『空海全集』第1巻)。

51) 『辯顯密二教論』149 ページ (『空海全集』第2巻)。

また、宝鑰に「顕薬塵を払い、真言、庫を開く」と仏教の教えを薬にたとえた有名なことばがある。ここでは真理が庫の中の宝物にたとえられている<sup>52)</sup>

### 矢を空中に射てはならない

空海は、「蟯虫は定んで蟯にあらず」を第三住心のためのたとえに使っている。しかしながら、第三住心「婴童無畏住心」は仏教以外の宗教を求める心であり、空海にとっては、「いつときの安らぎを得る心」のあり方にすぎない。三界の諸天の最高位である非想非非想天であっても、天の教えは究極の道ではない。その「浅略の意味のみ理解すれば、生死に沈みおちて解脱することはいできない」<sup>53)</sup> 矢を空中に射ても、力が尽きれば地上に落ちるようなものである。だから天上界など願ってはならないという<sup>54)</sup>

仏教以外の者の教えは幻や夢や陽炎のようにはないものである<sup>55)</sup>

大日経では、幻や夢や陽炎は存在するように見えて、実際には存在しないものの例として取り上げられていた。空海は、はかない教えのたとえとしても言及している。

### 浄らかな心

心が浄らかである時、仏を見ることができるが、心が浄らかでない時は、仏を見ることはできないと弁顕密二教論で述べられている<sup>56)</sup> これに関してはいろいろなたとえが用意されている。日が出て、眼の不自由な人には見えず、雷震で地が震えても、耳が不自由な人は聞くことができない。くもりのない鏡をもって、浄らかな水の面を照らせれば見えるが、鏡が汚れて浄らかでない時は、水の面を見ることができない。華嚴経で説かれる「海印三昧」もしばしば言及されているが、これも同様のたとえであろう。

52) 『秘蔵宝鑰』16 ページ (『空海全集』第2巻)。

53) 『秘密曼荼羅十住心論』282 ページ (『空海全集』第1巻)。

54) 『秘蔵宝鑰』33 ページ (『空海全集』第2巻)。

55) 同上 38 ページ。

56) 『辯顕密二教論』211 ページ (『空海全集』第2巻)。

### ありのままに自己の心を見る

ありのままに自己の心を見るということは、すなわち一切智智、すなわち仏のさとの智慧を得ることであるとされる。しかし、愚かな一般の人々はあらゆるものの根本的なあり方を観察していないという。無智な画師が自分で種々の色の絵具を運んで、恐ろしい夜叉の姿を描き、描き終わってからふたたび自分でそれを見ているうちに、恐ろしくなって急に気絶してしまうようなものである<sup>57)</sup>

### 薬草を見つける

普通の者にはただの雑草としてしか見えなくとも、医者を目で見れば、道ばたにはえる草がみな薬に見える。鉾山を見分けることができる人は、鉾石を宝として見るができる。そのように、秘密の意を理解しうる目をもってすれば、顕教といわれる経の中に秘密の意味を読みとることができる<sup>58)</sup>

### おわりに

以上、たとえ話に着目して空海のことばを拾い出し、いくつかのまとまりごとに分けてみた。もちろん何かの体系があるわけではない。お遍路と同じように先に行動ありの作業であった。空海の宗教思想は、十住心論のように本来体系的に学ぶべきものであるかもしれない。しかしランダムであれ、お遍路に出てふだん見ることのない光景に遭遇したときに、空海の言葉を思い出して、それを参考にして自然のことばのより深い意味を考えてみることも有意義ではないか。そういう目的で行った作業であった。

四国遍路は、どこから始めてもどこで終わってもよいとされている。順打ちでも逆打ちでもよい。四国遍路は大自然からの学びであるが、それは学校での学習のような定食メニューではなく、自由な学びである。しかし、とにかく歩き続けること、前進することがだいじなのであろう。前に進むというのは、霊

---

57) 『卍字義』308 ページ (『空海全集』第2巻)。

58) 『般若心経秘鍵』371 ページ (『空海全集』第2巻)。

的にはより高い境地に入ることである。『弁顕密二教論』には、浅い顕教の教えの網にひっかかって、より深い教えである密教に入ろうとしない者は、あたかも雄羊が垣根につかえて進めないようなものであり、旅人が仮の関所にふさがれて、税金で難渋しているようなものであると述べられている<sup>59)</sup>。こは、顕教、密教にこだわらず、今の自分よりひとつ前進するという理解でもよいのではないだろうか。そういうイメージを胸に、一步でも前に進むということを大切にするのがお遍路ではなかろうか。

### 参考文献

- エリアーデ、ミルチャ『太陽と天空神 宗教学概論Ⅰ』せりか書房、1974  
大賀睦夫「四国のスピリチュアル・ツーリズム」香川大学経済学部ツーリズム研究会『新しい観光の可能性』美巧社、2008  
大賀睦夫「四国遍路におけるメタファー思考について」『人体科学』第19巻第1号、2011  
弘法大師空海全集編集委員会編『弘法大師空海全集』筑摩書房、1984、第1巻～第3巻（引用では『空海全集』と略）  
スウェーデンボルグ、エマヌエル『真のキリスト教 上』アルカナ出版、1988  
宮坂有勝訳注『密教經典』講談社、2011

---

59) 『辯顕密二教論』272 ページ（『空海全集』第2巻）。